

都市居住者の「人付き合い」のための空間的移動行動

刀根令子

Urban Residents' Travel Behaviors to Meet with Their Acquaintances

Ryoko TONE

Abstract: This research focuses on urban residents' travel behavior to meet with their acquaintances. Survey on residential preference was conducted in 2007 and those data were used to find characteristics of relations among some factors related to respondents' personal connections. Variables considered in this paper were "relation types" (colleagues, alumni and relatives etc.), "frequency of meetings" and "travel times from respondents' houses to their acquaintances' houses". Results have provided basic information to grasp characteristics of urban personal network in spatial macro scale.

Keywords: 都市居住者 (Urban Residents), パーソナルネットワーク (Personal Network), 空間的移動行動 (Travel Behavior), 社会・心理的サポート (Social-Psychological Support)

1. はじめに

情報通信手段が発達した現代都市においては、物理的な移動なしに必要な情報のやり取りが完了することも多い。しかし都市内(間)を移動し、誰かとどこかで物理的に会って何かをするという日常的な経験も依然として、人間にとって重要な社会的・心理的サポートとして機能していると考えられる。

本研究は現代都市において、地理的な距離が友人・知人との関係に与える影響について把握し、現代都市の対人関係やパーソナルネットワーク(Fischer, 1982)を、空間情報を用いてマクロな視点から分析することを目的とする。本論文では、特に空間的な移動を伴う人付き合い行動について把握するため、友人・知人に会う頻度、その人に会う

ためにかかる移動時間、また、その人との関係性に着目した基礎的な分析を行った。

2. 調査内容と分析に使用する分類、指標

2.1 調査の概要

2007年に実施した住環境選好・評価に関するWebでの質問調査のデータを用いる。この調査は2004年に行った、東京近郊に住宅を購入した人を対象とする住環境選好・評価調査のパネル調査として実施したものである¹⁾。

2.2 友人・知人の関係性の分類

分析には上記の調査データのうち人付き合いのための移動に関する質問項目に対する回答データを使用した。分析に使用するのは、普段の生活の中で、会う頻度別に4種類(1週間に1度程度会う友人・知人, 1か月に1度程度会う友人・知人, 半年に1度程度会う友人・知人, 1年に1度程度会う友人・知人)の友人・知人について回答されたデータ

刀根令子 〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学 大学院工学系研究科 都市工学専攻

Phone: 03-5841-6259

E-mail: ryo-t@ua.t.u-tokyo.ac.jp

である。Webでの調査画面では各頻度の友人・知人について最大3人まで答えることができ、その人との関係性、その人の最寄り駅、自宅間の移動にかかる所要時間(分)を交通手段別(徒歩、自転車、自動車、電車)に入力できる画面設計となっていた²⁾。

今後の分析においては、1週間に1度程度会う友人・知人の1人目に上げられた友人・知人をA1、2人目をA2、3人目をA3と呼ぶ。同様にして、1か月に1度程度会う友人・知人をB1、B2、B3、半年に1度程度会う友人・知人をC1、C2、C3、1年に1度程度会う友人・知人をD1、D2、D3と呼ぶ。今回の分析では、各頻度1人目にあげられた友人・知人(A1、B1、C1、D1)のデータのみを使用した。友人・知人との関係性についての自由記述のコーディングに際しては、「選択自由度」の違いを考慮して表-1の1~12の関係性に分類した。選択自由度とは、友人・知人を選ぶ自由度の高さである。恋人や過去の仕事の同僚や学校の同窓生などは、付き合い続けるかどうかを本人の意思で判断できる自由度が高いと考える。一方、現在の仕事での友人・知人などは日常的に関わりを持つが、本人の意思で選択する自由度は低いと考えられる。本研究では前者を選択自由度の高い関係、後者を低い関係とする。

2.2 関係の重要性の指標

本研究では、回答者本人がその友人・知人との関係をどの程度重要であると考えているかを測る指

表-1 友人・知人との関係性の分類

1. 親族(l)	2. 仕事(現在)(l)
3. 仕事(過去)(h)	4. 学校(過去)・幼馴染(h)
5. 近所(現在)(l)	6. 近所(過去)(h)
7. 子ども関係(l)	8. 家族、恋人、友人の知り合い(l)
9. パートナー、恋人(h)	
10. 趣味(スポーツ・アウトドア系)(h)	
11. 趣味(文化系、内容明記なし)(h)	
12. その他(関係性指定なしの友人・知人、飲み友達、犬友だち、恩師、地元、郷里、先輩、宗教、思想)(h)	

※選択自由度の高い関係(h)、低い関係(l)

標として、その人に「会う頻度」と「会うために移動する距離(時間距離)」を用いる。この2つの指標をその人との「関係の維持にかかるコスト」と想定するためである。会うために移動する距離としては、自宅間を移動する場合にかかる時間距離を用いる。自宅間移動時間を関係維持のコストの変数と捉える背景として、以下の想定がある。

実際には自宅間を行き来しないで他の場所で会う場合もあるが、友人・知人と会う場所を決める場合、互いの自宅(起点)から見た中間地点など、双方にとって時間的・経済的に同等のコストを払う場所で会う可能性が高いと考えられる。そのため、本研究では実際に自宅間を行き来しているか否かに関わらず、自宅間移動時間を友人・知人との関係維持に関連する変数と扱う³⁾。

3. 分析

3.1 友人・知人との自宅間移動時間

どういった関係性の友人・知人が地理的に近くに(遠くに)住んでいるだろうか。自宅間移動時間は、交通手段別(徒歩、自転車、自動車、電車)に答えてもらった時間(分)を合計したものを使う。会う頻度別にみると、自宅間移動時間(合計)の平均値は、A1が23分、B1が40分、C1が56分、D1が69分と、会う頻度が少なくなるに従い移動時間は増加していくことが分かった⁴⁾(図-1)。

相手との関係性の性質によって、移動時間に違い

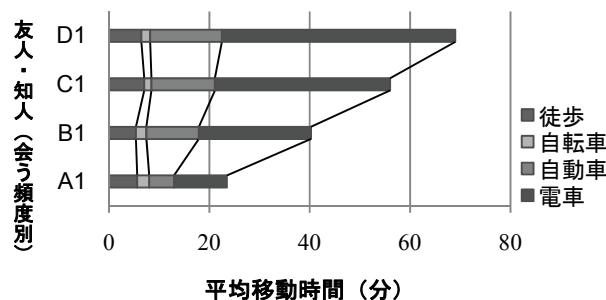


図-1 友人・知人との自宅間移動時間(会う頻度別)

があるかを調べるため、まず選択自由度の高低により自宅間移動時間が異なるかどうかを t 検定により検証した（各頻度別）。

その結果、A1 と B1 においては、選択自由度高い関係性の方が、移動時間平均値有意に高いことが分かった（A1 : $t = -2.887$, $df = 281$, $p < .01$, B1 : $t = -2.227$, $df = 324$, $p < .05$ ）。つまり選択自由度が低い関係性（職場や子ども関係の友人・知人など）よりも、選択自由度の高い関係性（趣味や過去の友人・知人など）の方が、地理的に離れた場所に住んでいることを示していると考えられる。C1, D1 では逆に、選択自由度の低い関係性の方が移動時間の平均値が高かったが、いずれも有意な差ではなかった。

3.2 友人・知人との関係性

回答者が普段、どのような関係性の友人・知人と会っているかを会う頻度別（A1, B1, C1, D1）に見た（図-2）。週に一回や月に一回など日常的に会う機会のある関係性は、現在の仕事の関係者（2）や、子ども同士が友達といった子どもを介した関係（7）、同じ趣味の友人・知人（10, 11）などである。一方、会う頻度が半年や一年に一度と少なくなると、過去の学校の同窓生（4）や過去の仕事の関係者（3）といった過去の人間関係を継続している例が多く観察されるようになる。

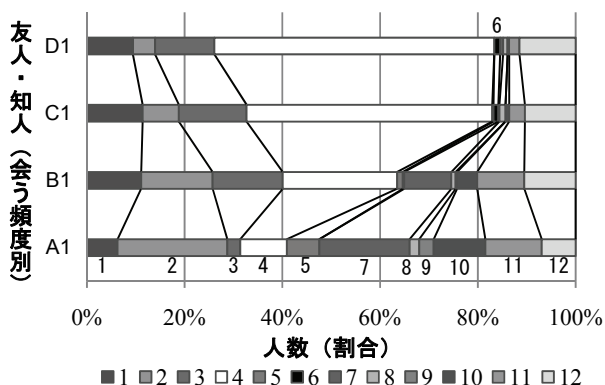


図-2 友人・知人との関係性（会う頻度別）

※ A1: $n = 303$, B1: $n = 342$, C1: $n = 404$, D1: $n = 330$

このように、3-1 の自宅間移動時間、3-2 の関係性の分析結果を見ると、どちらも会う頻度によって傾向が異なっていた。特に 3-1 の自宅間移動時間の t 検定の結果から考えると、「一か月に一度程度」の頻度と、「半年に一度程度」の頻度との間に、会う友人・知人との関係性の性質が変化する境があるといえるのではないかと考えられる。

3.3 関係性と自宅間移動時間の関係

関係性と自宅間距離の関係をさらに細かく把握した。ただし、頻度によって出現する関係性の種類や割合がかなり異なることが 3-1 の分析で分かっているため、一つの頻度（B1）に絞って関係性別に移動時間の平均値を比較した。A1 は現在の仕事や近所、子ども関連といった選択自由度の低い関係性が B1 以降より多く観察され、日常的に会わざるを得ない人の情報が多い。一方 C1, D1 では過去の人間関係が多く観察され、日常的な人付き合いの情報が少なくなる。そのため、他の頻度に比べ、様々な関係性の人の情報が含まれる B1 を取り上げた。

図-3 の子ども関連の友人・知人（7）との自宅間移動時間の値が小さいのは、子ども関連の友人・知人が近所に住んでいることを示していると考えられる。また、親族（1）への移動時間が最も長いですが、これは、実質的な用事で例え遠くても一か月に一度は行かなければならない事情が存在する可能性が考えられる。このように、今後の分析においては、関係性から推測される事情の違いも解釈の際に必

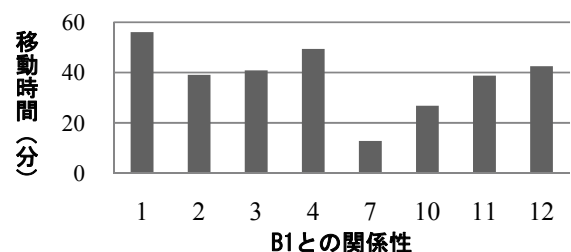


図-3 関係性と自宅間移動時間（B1）

※ $n < 10$ の関係性（5, 6, 8, 9）は除く

要となると考えられる。

4. まとめ

本論文では東京近郊の都市居住者の友人・知人との付き合いのための移動行動に関する基礎的情報を把握した。会う頻度によって友人・知人の種類（関係性）や移動に要する時間が変化し、半年や一年に一回程度会う友人・知人には過去の人間関係が多くなること、相手との関係性によっても移動時間（時間距離）が異なることを示した。

今後はこれらの基本的な情報を踏まえ、回答者と友人・知人との位置関係（双方の最寄駅等）の情報を用い（図-4）、日常行動と都市内（間）移動に関する空間的な変数との対応を見る分析を進めていく。現代都市における人付き合いが社会-心理的サポートとしてどのように機能しているのかを空間的にマクロな視点から把握する分析を深めたい。

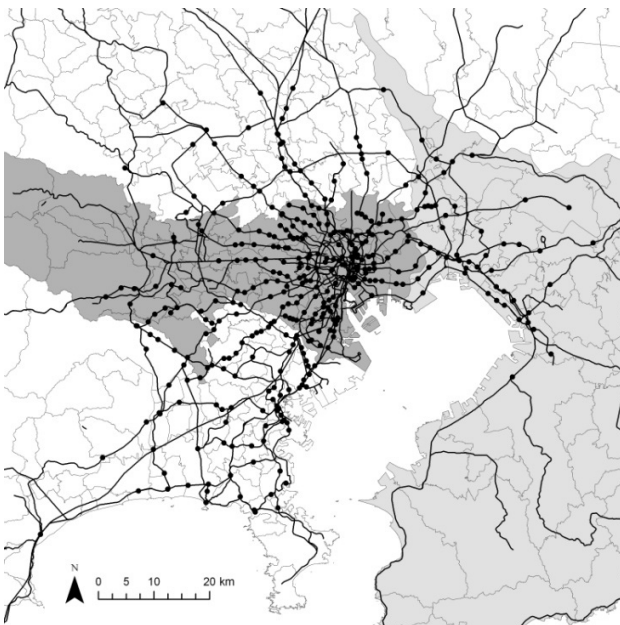


図-4 回答者の最寄駅の分布

謝辞

調査設計に際しご指導頂いた東京大学 浅見泰司教授、麗澤大学 清水千弘准教授、実施に際しご協力いただいた株式会社リクルートに記して謝意を表す。本研究は科研費（22730381）の助成を受けたものである。2007年の調査は平成19年度土地関係研究推進事業（国土交通省）の助成を受け実施した。

補注

- 1) 有効サンプル数は621人であるが、本分析では友人・知人に関する項目に回答のあるデータ、最寄駅の情報のあるデータなど、限定されたデータを使用した。2004年の調査の詳細は刀根（2009）参照。
- 2) 回答例と同じフォーマットで、各頻度3人分回答できるように設計されていた。以下が回答例である。
「1週間に1度程度会う友人・知人
・友人・知人A・関係性（会社の同僚）
・友人・知人Aの家の最寄り駅（JR秋葉原駅）
・あなたの家から友人・知人Aの家までの所要時間：
（徒歩 約 分）+（自転車 約 10分）+
（自動車 約 分）+（電車 約 分）」
- 3) 職場の友人・知人の場合は、通勤にかかる時間距離は友人・知人に会うためのコストとは言えないので、その点を考慮して解釈する必要がある。
- 4) 自宅間移動時間の平均値や最大値は各頻度（A1, B1, C1, D1）ごとに外れ値を除外して計算した。

参考文献

- 刀根令子(2009)：鉄道路線エリア間比較による住環境の社会-心理的評価の地域的差異と地域イメージの生成要因に関する分析，GIS—理論と応用—，17-1, 111-122.
- Fischer, C.S. 1982. To dwell among friends: Personal Networks in Town and City, The University of Chicago Press.